

2008年 北海学園大学 経営学部
菅原秀幸ゼミナール 北米海外研修旅行
2008年9月10日(水)~19日(金)



今回、海外研修という学校を飛び出しての学びで私が得たものは、“コミュニケーション能力の重要性”、“他文化から日本が見えてくる”、“新たな世界が人格を豊かにする”という3点だ。

私は、さっそく初日からコミュニケーションの壁にぶつかった。

シアトル行きの飛行機で私の隣は中国人の男の子だったのだが、機内食を食べている時に、彼が“I don't like it”と言って私にサラダを差し出してきたのだ。私はお腹が空いていなかったのですが、サラダはいらなかったのだが、彼の好意を断るのも申し訳ないと思ったし、断る言葉も見つからなかったで、”Thank you”と笑顔で受け取った。

結果、そのサラダは残してしまっただが、そこから少しずつ会話をするようになった。

彼も英語が得意ではなく、お互い片言な英語での会話だったが、同じ年で、彼も学校のプログラムで初めての海外だということがわかった。

時々、お互いの英語が伝わらない場面があったが、ボディランゲージや違う単語に置き換えることで、理解しあうことが出来た。

私は今まで、外国人だと構えてしまい、上手く会話することが出来なかったのだが、この経験で、同じ人間なのだから伝えようとするのが一番重要なのだと実感することが出来た。

コミュニケーション能力については、Hyogo Business & Cultural Center の北岡さんのお話がとても興味深く印象的だった。

北岡さんは、とても親切に私たちを迎えてくれ、国際経営をする上での文化の重要性について話してくれた。北岡さんは、文化の違いの1つの例に、世界と日本の教育の大きな違いについて話してくれた。日本は“満点方式”といって、最初は100点からスタートし、どんどん減点していくという教育方法。それに比べ、欧米はもちろん、世界では“加点方式”といって0点からスタートし、頑張り次第で加点されていくという教育方法だ。

減点方式の日本では、生徒は間違いを恐れるが、加点方式のアメリカでは、失敗しても0のまま、正解するとプラスなので間違いを気にしない。この教育方法の違いが、日本人特有のシャイな性質を形成したと思われる。間違いを恐れないことと、度胸はコミュニケーションをとる上で、とても重要なことだ。

北岡さんは、「もっと自信を持って下さい。Hello と挨拶出来ればプラス5点なんですよ。」と言ってくださった。

私は、この言葉に感銘した。今までHelloと言えたらプラス5点など言われたこともなかったからだ。そのように考えると、学ぶことが今までの何倍も楽しくなるように思えた。

私は研修で、外国人とコミュニケーションをとるには、難しい英語の単語をいくら知っていても意味がないと感じた。そんなことよりも、「Hi! How ya doing?」と笑顔で一言いえる方が何倍も、その人と通じ合うことが出来るのだ。

次に、“他文化から日本が見えてくる”というトピックなのだが、人生で初めて海外に行った私は、見事にカルチャーショックを幾度となく受けた。

初日から感じたことは、アメリカ人はとにかく明るく、ポジティブ！道でぶつかりそうになった時のSorryまでもがフレンドリー。

日本を歩いているのとは全く違う空気だった。日本は、道を歩いていても皆が生き急ぎ、疲れている

感じだ。

それに比べアメリカは、路上でパフォーマンス、人々は陽気に大声で話し、知らない人ともジョークを言って笑いあっている。

今回は、アメリカとカナダの二カ国を訪問したので、比較しながら研修した。

カナダ人はアメリカ人と日本人の中間の性質だと感じた。

日本では、エスカレーターで片側によけるのが常識だが、アメリカでは一度もそんな場面には遭遇しなかった。カナダでは、右側によける傾向があった。

私が、両国で一番違うと感じたのは街並みだ。アメリカは高層ビルや、長いバス、とにかく全てがビッグだ。

一方、カナダは1、2階建のショップがおしゃれに立ち並び、落ちついた雰囲気。歩いている人もお洒落だった。

私は、そこから“文化が人格を作るのではなく、人格が文化を作る”のだと肌で感じた。

アメリカ人は、明るく、個人を尊重するが、雑な面がある。この性質が、料理の大味さ、良い意味での自由な風土を作り上げている。

一方、カナダ人は、フレンドリーな半面、繊細で感性が鋭い面を持ち合わせているので、街にアートが溢れていたり、ファッションに気を使ったりするのだろう。

私は、国によってこんなにも全てが違うことに驚いた。

日本では、気にも留めない私たちの行動や文化の1つ1つが、日本という国を形作っている。世界に出ることで新たに見えてくる日本があった。

私は、アメリカもカナダも素晴らしい国だと思ったが、やはり日本の繊細さや、趣が好きで、日本の歴史や文化を改めて知りたいと思った。

最後に“新たな世界が人格を豊かにする”

菅原教授の海外研修の凄いところは、自由時間はもちろんのこと、移動までも、先生付きではなく個人でプランニングし行動するところだ。

これはとても貴重な経験で、道に迷ったなら自ら外人に話しかけないといけないし、英語が聞き取れなくても誰も助けてはくれない。

必死にならないと生きていけないのだ。大げさに聞こえるかもしれないが事実そうだった。このような状況の10日間で、自分の長所・短所がはっきり見えてきた。

長所は、意外と行動力がある、パニックにならない、適応能力が高い。

短所は、楽観的、集団の中で目立つことを避ける、自論が強い。

私は、海外研修に行くことで自分の何かが劇的に変化するかもしれないと思っていた。しかし、劇的に変化はしなかった。

変化ではなく、私は今回の研修で今の等身大の自分自身を知ることができた。

私は、日本の日常生活の中で十分、自分を詳細に分析できていると思っていたが、間違っていた。

人は、場によって違う側面を持つ。家族という自分、学校の自分、バイト先の自分、恋人という自分。それぞれ違う自分があるが、紛れもなく、その全てが自分である。

これと同じように、生まれた国にいる自分と、広い世界に出た時の自分は違った。

人は常に、新たな環境に身を置くことでしか成長できないと思う。

今回は、菅原教授が海外研修という大きなプログラムを設置してくださったが、これからは、自ら好奇心とチャレンジ精神を持ち、日常の小さなことも含め、新たなことに挑戦する中で、人生を豊かにし

ていきたいと思う。

最後に、このような素晴らしい機会を与えてくださった菅原教授、お忙しい中、お会いして下さった全ての方たちに心から感謝いたします。ありがとうございました。

「意識の変化」

2年 AS

シアトル・バンクーバーと滞在期間中は毎日が勉強でした。欧米人と日本人の違いを肌で感じたり、自分から進んでなにかをしようとしたり、何かを吸収しようと貪欲でいられました。ただのツアーと違い観光地を巡るだけでなく、Ginnさん、山口さん、Tatsusさんのように海外で働いている方のお話を聞く機会があったことを嬉しく思います。今回の旅行で私は少しでも自分の中で変わった部分がある、と実感しています。

第一に私は失敗をしたからこそ学ぶことができることを知りました。もともと私は失敗するのを恥かしいと思いきや嫌がり逃げていました。このマイナスな考えは海外滞在期間中に打ち砕くことができました。なぜなら滞在期間中は“失敗するのが当たり前”の毎日だったからです。また失敗したことで得たことが数多くありました。

シアトルについて早速チップで失敗しました。運転手さんがわざわざ人数分の一ドル札をおつりにくれたのに、その意味が分からずそのまま受け取り、“Thank you”と2回以上言って彼に背を向けました。それが渡すべきチップだったことは、彼が帰った後に友人に教えてもらいました。“You can keep it.”これが私の現地で初めて失敗して学んだことでした。

失敗があったからこそ学びとれたことがあった、初日にこのことを知ることができた私はラッキーでした。日数を重ねるごとに失敗することになれ、言葉が通じない事をとて憂鬱に感じていたことも、“言葉が通じないのが当たり前”と考え方は変わっていました。この開き直りとも言える考え方のおかげで最終的には、話すことを楽しめるようになり現地の方々に道を聞いたり、地下に走るバスのことを聞いたり、トイレを借りたり、自分から話しかけました。

山口さんが“何もしないことが1番のミス”とおっしゃった意味を痛感しました。

二つ目に上げられることは“行動面・主体面に積極性が増した”ということです。

最初の頃は人任せで、それに付いていっただけでした。それが最後には“一人で行動したい”と思っている自分がいました。これは私にとって大きな前進でした。もともと消極的な私は、誰かに付いてことができ多く自分のしたいことはないがしろにしてきたところがありました。ですが先にも述べたように失敗を恐れなくなったらフットワークが軽くなり、自分の行きたい所、自分のしたいことに一人で挑戦できるようになっていました。誰かに付いていくのじゃ物足りなくなり、自分だけで考え動きたくなくなりました。頼る友人がいない分、その方が現地の人とのコミュニケーションも増えるだろうと思ったからです。

こんな風に誰か見知らぬ人に話しかけるなんてことは、日本にいたらまず無かったでしょう。それが自分から気軽に話しかけられるようになっていました。拙い私の英語を理解するまで根気強く付き合ってくださいました現地の方々からこそ、話しかけようという気持ちが増したのだと思います。

ここで私が感じた欧米人と日本人の違いを挙げます。まず、先の話に通じて大半の日本人は外国人に話しかけられたらまず逃げるだろう。理解しようと根気よく最後まで付き合う人は、そうそう日本人はいないでしょう。また、彼らは楽しそうに物事をこなしていくのに対し、日本人はつまらなさそうに物

事をこなしています。自ら進んでやっているという意識と、やらされているという意識では仕事への情熱も変わってくるでしょう。前者に当てはまる欧米人が多いのに対し、日本人の多くは後者に当てはまると思います。

また、日本人は人目を気にしすぎている部分があります。もし日本の街中で、林檎を丸かじりしながら歩いている人がいたら、その人は周りから少し浮いた存在に見えるでしょう。ですが、シアトルで林檎を丸かじりしながらショッピングを楽しんでいる女性を何回か見かけました。“人目なんか気にしない、私は私よ”と言っているかのようでした。ファッションに関しても同じことが言えます。人と違う奇抜な色を着て歩く日本人はなかなかいません。人目を気にして、みんなと同じような事をする、日本人は周りに合わせることで安心感を得る民族なのだと思知らされました。バンクーバーで会った日本人（ほとんどが赤の他人だろう）の服装がみんな似たり寄ったりだったからです。まるでそれが民族衣装かのような感じでした。

このように日本人を客観視できたことは面白かったです。日本人のいいところも悪いところも知ることができました。私も外国人から見たら典型的な日本人の一人として見えているのだな、と考えたら、彼らが感じているその日本人レベルと私は差をつけたいです。

最後に、仕事に対する考え方が変わりました。北岡さん・山口さん・コマダさんの仕事に対する考えを聞いているうちに、私もアルバイトで接客業をしているのですが、楽しむ余裕をもってやるのではなく、やらなくてはいけないことと自然に考えていました。同じ仕事内容を毎日繰り返すだけの単一的なものでした。

ビジネスとは人と人との繋がり合い、コミュニケーションを積極的にとる、人に頼るのではなく自分でやる意識をもつ、この3点を意識したとき、やらされていると感じていたアルバイトが楽しくなりました。何が今必要とされ、できるのかを考えるようになっていました。

また仕事基盤の日本のビジネス文化と違い、コミュニティを大切にするアメリカの“クオリティ・オブ・ライフ”の考えに魅かれました。出勤・退勤時間の自由、職場は個人個人に部屋がある、ギスギスした緊張感がない、日本の職場とは違いが多いです。最近では日本の企業もコミュニケーションを大切にしているようです。会議室を使わず、小さな机を囲んで立ったまま会議をする“立ち会議”など、リラックスをし、上司にも自分の意見を言いやすいように工夫されているそうです。

国際的なビジネスに必要とされるものは情報・知識・コミュニケーション力・体力だと思います。他国の動きの情報を知り常に新しい物にしておくこと、また日本人としてのアイデンティティを持つこと、働く国の文化・風土・人の考えを考慮することが必要とされていることを知りました。

日本人としてのアイデンティティや日本の文化について質問されたら、答えられることはあまりないでしょう。国際的な活動の第一歩として、常に新しい情報を手に入れようと新聞やインターネットを十分に活用することが挙げられます。これは今からでもできることなので、取り組んで、自分の知識・見聞を広げたいです。同時に他国ばかりに目を向けるのではなく、自国の文化・情勢にも興味を持つことを大切にしたいです。

この旅行で私は、①失敗することは自分の知識・経験を増やすこと、②自分自身を大きくするには積極性が本当に重要なこと、③やらされているのではなく、楽しんでやるという仕事に対する考え方、の3点が自分の中で強く印象に残りました。意識が変わったら行動も積極的になるなど、自分も変わりました。日本にいたら知らなかったことを目いっぱい吸収することができました。自分で情報を得たり、調べたり、人とのコミュニケーションを大切にし、これからも貪欲に物事を吸収してどんどん成長していきたいです。興味のあることに挑戦する、本や新聞を読む量を増やして見聞を広める、英語の勉強を

するなど、自分にプラスになることを少しずつ実行に移していきます。

9日間という短い期間で自分の弱いところを改めて知ることができ、成長できたことを嬉しく思います。また、北岡さん、山口さん、コマダさんのように海外で働いているかたのお話を直に聞くことができたことに感謝します。

“The turning point in my life”

2年 YW

今回のアメリカ・カナダ研修旅行を通じて触れて、感じて、学んだことは、簡潔に述べると、まず一つは、時間の有効性、二つ目は、自分から行動する重要性、3つ目は変化。

一. 時間というのは、過ぎ去ってしまったら決して戻って来ないのであり、また未来を約束する手段でもある。そう考えるなら、自分は時間という概念に、“今”を大切にしなければならないだろう。

海外に行くまでと海外に行ってからの時間の捉え方は、全く違うものになった。8泊10日で28万1000円、今まで自分のバイトのお金をすべて注ぎ込んだ旅だった。1時間当たりで換算したところ、1500円/hだということに気付かされた。決して時間はお金で換算出来ないものの、限られた時間の中で、自分には一番何ができるのか、それとも何もしないで、ただ単に1500円を捨てるのか、そんなことは意地でも絶対にしたくないという気持ちがあった。色々選択肢がある中で、常に最善の方法を見つけ、限られた時間を有効に使うのを学んだ。時間をお金に換算できるのであれば、今まで生きてきた中で、睡眠時間、無意味もなく遊びに使った時間は今思えば、本当に惜しかったと感じる。そう思える今となっては、自分は間違いなく変わった。

二. 二つ目に、自分から行動することは、道を聞くにも、自転車をレンタルするにも、ただ単に黙っていて人に「どうかしたのと？」聞かれるのを待っていても全く無意味なことである。自分から行動するには、まずプラン作りだ。

今回の旅では正直に言えば、自分は多少なりとも他力本願の部分があったが、いざ一人で、行動する境地になればなるほど、そのプラン作りの重要性がわかった。また特に、自分の意見をしっかりと相手に伝えることが重要である。道を尋ねるにしても、躊躇してなんかいられない。例を挙げれば、メニューのオーダーを注文するとき、日本ではメニューに載っているものを指差しさえすれば、注文できるが、海外ではステーキの焼き加減やサンドイッチの中身を伝えなければならない。何度も強いて言うようだが、海外にいれさえすれば、躊躇う時間など一切ないということだ。

三. 3つ目は、自分の変化だ。海外に行く前と後では、明らかに自分の内心に変化が現れたのは確かだ。以前の自分は人見知りで、初対面の人と会うと、自然に気持ちが避けていたが、海外から戻ってきた今は、心がオープンになった気がする。それはアメリカ・カナダの人との会話のやり取りの上で、自分から話しかけるという勇気や努力、また、店員が「How are you today?」「Have a good day!, Have a good night!」等の会話のやり取りをするようになってからだと感じる。日常生活の何気ないやり取りが、自分の気持ちを変化させたのだろう。

さらに、現状の英語力でも、会話できるという「どこに行っても何とかなる」という精神を学んだ。とにかく自分の気持ちを相手にしっかり伝えることの重要性を知った。さらに経験して言えることは、人間生きていく上で、自信が必要だ。自信があるのとないのとでは、大きく違うが、ただ自信がなくても、いつでも自信を身につけることができるし、自分の気持ち次第だということがわかった。

～考察～

海外で仕事をするには、そこの文化、政治、ヒトを理解しなければならない。文化が違えば、人とヒトとの関わり方も変わり、コンタクトを取るときにはその点を基盤において対応しなければならない。しかしながら、自国の文化、自分のアイデンティティーを決して捨て去ってはいけない。人間は個性を無くしてしまったら何も残らなくなる。特にアメリカのシアトルの街を歩いて、多文化の人種が共存しているものの、その社会に飲み込まれている人がいるとは感じなかった。世界は広く、もっと広大で限らない可能性があると感じた。このような内容の濃い8泊10日は今まで生きてきた中でなかった。これが最後の海外の旅には決してならないことを強く願いたい。

～The turning point in my life～

アメリカ・カナダに行ったことをつい昨日行ったかのように思い出す。バンクーバーの一日を一人で行動し、スタンレーパーク付近で自転車をレンタル。ペダルを踏むあの軽やかさはこれまでの人生ではなかった。その後大自然を前にして色々と考えさせられた。これからの自分の将来、今、自分に足りないものを埋め合わせるため、何度も心に誓った。

今やらなければならないこと…英語。自分の人生は永遠を約束するものではない、そうであれば“今”という時間を思う存分に生きることを学んだ。これは肩書なんかではなく、今心の底から感じることだ。せっかく身近に英語を感じているのをもう一度距離を置くということは、断じてしない。常に英語に触れて、考えて、発したい気持ちを忘れず、絶対日々努力していく。カタチは留学か、短期滞在のホームステイかはわからないが、長いスパンを空けずに必ず挑戦する。

～Message～

人生は積上げ方式で加点され、失敗であれ成功であれ、挑戦することに意義がある。

Life is the pile systems. It is very important for everyone to try everything, it doesn't matter that it makes it or not. By Y W

「キーワード3つ!!!」

2年 NS

自分から行動を起こすこと。

菅原先生が何度も繰り返して言う言葉。正直、研修旅行に出る前は、自分から行動を起こすことの重要さは分かっているつもりでも、この実行に移していない自分がいました。人と違うことを恐れ、“出る杭は打たれる”思想の日本。自分から積極的に動かなくても、ただ学校へ行って、バイトへ行って、友達と遊ぶ。それなりに楽しく暮らすことが出来る。そんな受け身の自分がいました。しかし、そんなただなんとなくの日常は、大切なチャンスを逃してしまうことになる。そんな教訓を海外研修で感じる事が出来ました。

私にとって初めての海外旅行、シアトルの空港に着いたときは不安と緊張と期待でいっぱいでした。入国審査は何も悪いことをしていないのに、なんだか犯罪者になった気分で、不安な私は友達に何をすればよいのか聞いてばかり。後ろをついて行ってばかりでした。そんな私が旅の終わりになるに連れ、一人で行動できるようになったのです。

きっかけは団体で街を歩いているとき。道が分からなくなってしまい、現地の人に道を尋ねてみるこ

とにしました。それでも私は英語が出来る人任せで、その人について行き、目的地に辿り着く・・・あれ、おかしい。これでは海外“研修”に来た意味がない。私は海外“旅行”に来たのではないのだから。団体行動は、英語を話せる人に頼ってしまう上に、せつかくの与えられた自由時間も自分の好きなように使えません。英語だって話してみないと伝わるのかも分からないし、自分の行きたい場所にもしかすると素敵な発見があるかもしれない。せつかく一眼レフも持って来たんだから、いろんな場所へ行ってみたくさん写真も撮りたいし！重大な間違いに気づいた私は、個別行動をすることに決め、さらに旅を有意義なものにすることが出来ました。

英語なんて、カタコトでも、ジャスチャーと単語を言えば伝わるんです。頑張って話そうとすれば、相手の人も耳を傾けてくれる。スターバックスの1号店を探しているとの英語が通じた時、食べたい味のサブウェイのサンドイッチが正確にオーダー出来た時、交通機関に乗れた時…失敗もしながら、自分から英語を話すという楽しさと伝わる感激を少しずつ積み重ねていきました。念願のボーイング社の工場見学はできなかったけれど（ストライキのばか！）何も情報がない白紙の状態から、えりかちゃんと夜中までバスの時刻表を調べたのも良い思い出です。

英語を話すチャンス、未体験のものに出会うチャンス、人との出会いのチャンス、海外にはあらゆるチャンスが転がっていました。この思い出ひとつひとつが、本場のものを体験するチャンスを掴んだからこそ経験できたことです。自分から行動することで、自分自身をより高めることが出来ました。

本物と接すること。

これも菅原先生が常日頃から繰り返している言葉。今回の旅で、私はたくさんの本物・一流と接しました。スターバックスで働いている私にとって憧れのスターバックス1号店。他の店舗と違って茶色を基調とした店内。働いている店員さんも素敵で、「I'm Japanese PTR!」と伝えると、笑顔で「NICE!!」と返してくれました。シアトル動物園は、まるでジャングルの中にいるみたい。見たこともない動物が放し飼いのような状態で生活していました。今まで旭山動物園ですごいと思っていたのに。広大な土地で暮らす動物たちは、なんだか生き生きしているようでした。他にも、イチローや大きすぎるステーキ、甘すぎるお菓子、毒々しい色のジュース、物語の中に入ってしまったような可愛いパイクプレイスマーケット。どれも初めて見るものばかりで感動の連続でした。

そして今回、企業研修でお伺いした兵庫ビジネス&カルチャーセンターのGinさん、Sozitsの山口さん、先生のお友達のタツさん、みなさんが一流であり、本物の人たちでした。考え方が日本人離れしていて、自分の仕事に誇りを持ち、輝いていて、本当にかっこいいなあと感じました。私も将来、自分の仕事に誇りを持てるような仕事に就きたいです。それが自分を輝かせて、周りの人たちにも良い影響を与えられると思います。残された学生生活で一流・本物と接することで、自分をどれだけ高めていけるか、勝負はこれからです。

感謝の気持ちを忘れないこと。

最後に、私たちのために計画を立て、アポイントメントをとってくれた菅原先生。高い旅行費を出してくれ、応援してくれた親。そして一緒に笑い合い、時には真剣に話し合ったゼミの仲間たち。心から感謝しています。

そしてこの旅を通して、本当に自分は恵まれていると実感しました。ここまで先生が親身になって行動してくれて、学生も一人一人が輝いているゼミは、間違いなく菅原ゼミだけです！

海外研修で得た自信や経験を糧にして、後期のゼミは自分の意見を持ち、もっと発言できるようにな

りたいです！…じゃなくて、なります！温かい目で見守っててください。9日間、ありがとうございました！

「異文化体験をした9日間」

3年 YT

海外研修旅行で学んだこと

今回のシアトルとバンクーバーへの海外旅行は私にとって初めての海外旅行であった。国内旅行の経験さえあまりない自分にとっては、札幌以外の都市の街並み、人々、自然の風景を見ることはものすごく刺激的なことだった。テレビや映画などの単なる映像や音声だけでは感じることはできないその場の雰囲気、空気感といったものを感じ取ることができた。そして、実物を見るのはやはり違うことを実感した。

この海外研修を通じて体験したことすべてが勉強になったと思っている。その中でも食文化の違いを最初に最も強く認識することになった。シアトルに到着した日の晩、ピザ屋に入りピザを注文すると、日本のピザの3倍はあるのではないかというぐらいの大きさのものが出てきた。コップも日本では考えられない程の大きさだった。店員は気さくで、細やかさという言葉は当てはまらないが、感じの良い人だった。最初に食べたこのピザを見た時点でアメリカ人が普段どの程度の量を食べているのかがわかった。

また、Hyogo Business & Cultural Center と Sojitz Corporation of America という企業を訪れた際に担当の方に聞いた話や、コマダさんとの食事会を通して聞いた話は、非常にためになっただけではなく、今回の海外研修をより実のあるものにしてくれた。

例えば、3者の話を混合して申し訳ないが、大統領選でどの人物が次期大統領に選ばれるのかといった内容で、日本ではオバマ候補が前面に押し出されているが、実際はマケイン候補の方がはるかに有力な候補者であること。そして、アメリカには諸外国に売るのがドルや軍需品ぐらいしかないと聞けば悪いがどこかで紛争が起こるような国をそそのかしているといった裏の話。

また、日本の企業とアメリカの企業の違いについての話で印象に残ったのは、日本の企業は出勤時間が決まっており、社員は朝決まった時間に出勤し、勤務時間が過ぎれば残業する場合を除き、決まった時間に帰る。一方、アメリカの企業は出勤時間が設定されておらず、社員はいつでも任意の時間に出社することができる。そして、残業はせず、夕方4時か5時ごろには退社して、その後の時間を家族と共に過ごしたり、自分の趣味の時間に充てたりする。一見、企業が組織として成り立っているのかという疑問があるが、要するに結果を出せばそれでいいのである。もちろん、アメリカのすべての企業がこのような企業であるとは限らないと思うが、ここで日本とアメリカの仕事に対する考え方の違いを認識することができた。よく日本の企業はプロセスを大事にし、アメリカの企業は結果を重視するといった話は耳にするが、今回の話を聞いて実際その通りなのかなという印象を受けた。

さらに、アランやダンとの交流会では自分の成長にとって非常に大きな一歩を踏み出せたという実感を得られた。レストランまでの道中、たまたまアランが自分の隣を歩いている時があって、沈黙を保っているのも気まずかったので自分から話しかけてみた。すると、相手は自分の質問にきちんと答えてくれた。自分の英語が伝わったことが実感できたので、会話をしたことは非常に良かったと思っている。

そして、食事会が終わりホテルに戻ってからはダンや2年生たちとともに、ダンが提案した名前はうる覚えだが、確かハングマンとかいう名前のゲームを行った。ここでは、会話ではなくゲームという形

式だったとはいえ、交流ができたという意味では、非常に有意義な体験をさせてもらったと思っている。非常に短い時間の会話ではあったが、自分から話しかけることができたという点において、とても意味のあることだったと思う。この瞬間が、今回の研修旅行で一番成長できたと実感できる部分であった。

反省すべき点

まず自分の反省点として、計画性の無さを挙げるができると思う。個人で行動した際、ほとんど行き当たりばったりで、次にどこへ行くかとか何をするかといったことは事前に考えておくべきことだが、ほとんどそれが出来ていなかった。結果的に、ただシアトルの街の中をぶらぶらとろついていただけだった。しかし、それでも多少のイベントはあった。街の中を歩いている時に、2人ぐらいに道案内を頼まれたり、信号を待っている時、向こう側にいた男性が自分に向かってファイティングポーズをとってきたりと、いろいろ刺激的だったとは言える。

次に反省すべきなのは仲間に依存しすぎていたということである。例えば、ミュージカルのチケットを購入する時、バスの行き先を運転手に聞く時などは岩井君が一人で行き、自分はほとんど何もしていなかった。それに、カナダのカーマナプラザホテルに宿泊した際も晩に部屋に備わっているキッチンを利用して皆で料理をつくることになっていたのだが、自分はベッドに座った瞬間急に睡魔が襲ってきて、そのまま寝てしまった。周りの人は気を使ってくれて、起こさないでいてくれたのだが、このときはさすがに周りの人に対して申し訳なく思った。

最後に、今回の海外研修旅行全体を通して言えることだが、自身の英語力不足を痛烈に反省せざるを得ない。3年に入ってからずっと英語から遠ざかっていて、全くと言っていいほど勉強をしていなかった。そのため、旅行の最初の頃は周りのアメリカ人が何を喋っているのかほとんど分からなかった。ただ、ダンとアランは自分たちのために比較的簡単な英語を用い、しかも割とゆっくりとしたペースで話してくれたので、聞き取りやすかった。次第に耳も慣れ、周りの人の会話も少しは聞き取ることができるようになってきた。しかし、相変わらずレストランや店の店員が何を喋っているのかは速すぎてよく聞き取れなかった。実際、聞き違いもかなりしていたと思う。

まとめ

今回の経験を通じて、まだまだ自分の力は不十分であることを再認識させられた。それをきっかけにして、また英語の勉強を真剣に始めようという気になった。もちろん、英語だけではなくそれ以外の大学の勉強にももっと真剣に取り組もうという気になった。

最後になってしまったが、研修旅行を企画した先生、旅行中、気を使って何度か話しかけてくださったゆう子さん、帰国する際、全員分のおにぎりを作ってくれたシズエさん、ためになる話を聞かせてくれた北岡さん・山口さん・コマダさん、ダンとアラン、いろいろサポートをしてくれたゼミの仲間、この旅行の費用の大部分を出してくれた両親には心から感謝したい。

「学んだことは一生モノ」

2年 AA

私は2008年9月10日から19日に行われた海外研修旅行に参加した。Seattleのダウンタウンに3泊、カナダのVancouver BCで2泊、再びSeattleに戻りワシントン大学近くで3泊した。今回の旅行で実感したことを、

- 1、仕事に対する姿勢の違い
- 2、積極的に行動することの大切さ
- 3、一緒に行ったメンバーの団結力

以上の3つにまとめることができた。

1、 仕事に対する姿勢の違い

日本を離れ、シアトルの空港に到着してすぐに受けた入国審査でさっそくカルチャーショックを受けた。入国に関する重要な仕事をしているはずなのに、フレンドリーに接してくる空港職員にとっても驚いた。ユーモアを言って私たちを笑わせるのである。空港を出て街を歩くと、さらに驚きが転がっていた。薬局でも本屋でもコンビニでもマクドナルドやスターバックスでも、工事現場のガードマンでさえも”Hello.”と目を合わせて微笑みかけてくれる。

声を掛けられるまで真顔でいた自分が少し恥ずかしくなった。買い物しようとしてレジに品物を持っていくと、”Hi. How are you?”と声をかけられ、さらに会計を終えて立ち去ろうとすると、”Have a good day.”と笑顔で言われる。たったそれだけの短い会話を交わすだけで、とても嬉しくなることができた。日本でいう「いらっしゃいませ」や「ありがとうございました」などの接客用語より、何倍も心がこもっているように聞こえた。私はその理由がわざとらしくないスマイルにあると思う。笑顔を活かすことは難しいことではないけれど、相手にも笑顔が浮かぶような笑顔をすることは日本人にとっては苦手なのかもしれない。

私がアメリカでみた人たちは、心から仕事を楽しんでいるように見えた。日本で、クタクタになって電車でウトウト船をこいでいるサラリーマンをたくさん見てきたせいもあって、人々が笑いながら楽しそうに働いているのを見て、日本もこうなればいいのにと心底思った。日本で見るサラリーマンは、「疲れた」と思っている、少なくとも「今日も仕事楽しかった」とは思っていないさそうである。12日に訪問した Sojiz Corporation of America の山口さんがお話ししてくださったように、仕事もプライベートも何事も Enjoy することが大切なのだと身に染みて感じる事ができた。

2、 積極的になること

12日に訪問した Hyogo Business & Cultural Center の Ginn さんの「加点方式で評価する」というお話にはあった。確かに今まで自分が減点方式でモノを見てきたことに気がついて後悔した。それと同じく、逆に今まで学校やアルバイト先で自分が減点方式で見られてきたのかと思うと少し嫌な気分になった。減点方式では悪いところばかりが目についてしまい、いい印象を受けにくい。

しかし、加点方式でモノを見ると、それまで見えてこなかったポジティブな面をたくさん見つけることができる。加点方式で評価されると思えば、積極的になったもの勝ちである。シャイでいることはとてももったいないことだと気づけて良かった。

3、 団結力

慣れないことの連続で早く帰りたいと思うこともあったけれど、最終的に自分を支えてくれたのは一緒に行ったメンバーだと思う。ほとんど毎晩みんなで過ごして本当に親密になれた。時間が経つにつれ

て、外国の地でたくさんのものを吸収して、みんながどんどん変わっていくのを感じて、少し焦ったり嬉しく思ったりした。

お互いに高めあっていける人たちだと信じてこれからも付き合っていきたい。旅行中に誕生日を迎えた私に日付が変わった瞬間にハッピーバースデーを歌ってくれたことは一生忘れないと思う。みんなできると自然に笑顔になれる。

最 後 に

ただ「行って良かった。いい経験になった。」で終わらせるのではなく、現地で吸収した数多くのことを、これから先の人生にうまく生かしていくことができ初めて今回の旅行に「行って良かった」と心から言えるのだと思う。行く前とは価値観や世界観が 180° 変わったこともあり、度胸がついた。これから先、今回の旅行で得たこと、特に上に書いた楽しそうに仕事をする（これはすぐにアルバイトの接客で実践する）、ゼミで行うグループディスカッションでどんどん意見を言うようにしたり、他の講義でも少しでも疑問に思ったことは質問したりして積極的になること、日々の生活を通して、仲間との高い団結力を実感できると信じて生活していきたい。

「自分が変わった 9 日間」

2年 MI

私にとって今回の研修旅行はとても有意義なものであり、人生の中で最も濃い 9 日間だったかもしれない。この研修旅行によって私は確実に変わった。このレポートではどのような体験を通して、どう変わることができたかについて述べていきたい。

私が変わることができた個所は大きく分けて 3 つある。積極性、広い視野、目標提示である。

1、積極性

私は今回の旅で唯一不安だったことは英語力である。海外へ行くと決まったあともほとんど勉強をせずに飛び立つことになった。1 日目は自分の駄目な英語が恥ずかしくて、「Yes」や「Thank you」しか話すことができなかった。自分の無力さを強く感じた。そんな私を変えてくれたのは、3 日目に北岡さんが言った「日本で英語教育を受けていれば、どこへ行っても通用する」と「英語を話せるようになるには、自信とあつかましさが必要だ」という言葉である。この言葉を聞いて考え方が 180 度変わった。

自分の英語を恥ずかしく思っている自分や周りを気にしている自分が馬鹿らしく思えた。この言葉に、私は腹をくくって、挑戦しようとして心に誓った。わざと道を聞いたり、ベンチに座っている人に声をかけたり、店で商品を注文したり、とにかくたくさん話した。話していくうちに、自信がつき、より積極的になれた。案外人間は腹をくくることができれば簡単に変われるということを感じることができた。海外へいたときだけじゃなく、日本でも自分のためになると思ったこと（授業中の発言、ボランティアへの参加など）は積極的に行いたい。

2、広い視野

物事を様々な角度から見る力は、どんなことにおいても重要な能力である。例えば、友達の性格を見抜くときや、新しいアイデアを出す時などである。しかし広い視野で物事を見るためには、まず多く

のことを知ることが最低限必要である。その意味で今回の海外研修は日本しか知らない私の視野をアメリカ、カナダまで広げてくれた。

アメリカ、カナダはとにかくすべてが大きい。それは食べ物であったり、建物であったり、心であったりする。多くのアメリカ人は目が合うと「Hey, hello」と声をかけてくれる。また道を聞くと笑顔で親切に教えてくれる。素晴らしい文化である。

日本にいたときは感じなかった日本人の寡黙さ。道で目があっても無視、友達と会っても恥ずかしさのためかほとんど挨拶はしない。このことは自分にとっても相手にとってもマイナスである。だから私は日本で挨拶を大切にしようと思う。「おはよう」「こんにちは」「よっ」なんでもいいが知人に会ったら笑顔で挨拶する。笑顔は人に幸せを与えると同時に自分も幸せになることができる。以上のことは海外へ行って初めて気づくことだ。ほんの小さなことでも知っているのと知らないでは全く違う。これからもインドやタイ、ヨーロッパなどを訪れて、どんどん自分の視野を広げていきたい。

3、目標提示

私は今回の研修旅行の中で目標ができた。それは1年以上海外へ行くことである。この目標ができた理由は2つある。1つは山口さんの話を聞いて、アメリカで生活している山口さんが単純にかっこいいと思ったからだ。私も同じようにアメリカで生活してみたいと思った。

2つ目は、研修旅行の中で外国の良いところしか見てきていないので悪いところも見たいと思ったからだ。悪いところを見るには1つの国にある程度長い期間滞在しなければならない。だから1年以上なのである。

この目標を達成するために、まず英語を勉強しようと思った。漠然と英語を勉強しようと思っても、身が入らないのでTOEICで高得点を目標にした。

次に情報収集である。できるだけ安く、しかも内容が濃いものを実現したい。個人的にはワーキングホリデーで行きたいと思っている。最後に資金集めである。今はまったくバイトをしていないので、早くバイトを探して働きたい。

目標があると自分も頑張れると思う。大学生活の中に目標を見出すことができれば、生活を以前とは全く違ったものに変えることができる。なんとなく過ごす、なんとなく楽しい大学生活ではなく、目標に向かって駆け抜ける、張りのある大学生活を送ることができる。

以上でも述べたように、研修旅行は私を大きく変えた素晴らしい経験であった。海外から日本に帰ってきてみて、いつも普通に感じていた日常がとてつまらなく思えた。こう思えただけでも海外へ行った価値がある。この研修旅行は確実に私の人生の分岐点になった。いや、10年後にそう思えるようにこれから行動していきたい。

最後にこのようなチャンスを与えてくれた菅原先生、バックアップしてくれた家族、友達に心から感謝申し上げたい。

「菅原ゼミ全体としての成長」

2年 EM

2008年9月10日から19日まで、私たち菅原ゼミのメンバー16名はシアトルとバンクーバー

を訪問した。ただツアーに乗かって遊びに行くのではなく、きちんと学ぶというのがこの海外研修旅行の目的であり、そのため海外研修の大半は自由行動になっていた。旅での私たちの自主性がとても重要視されていたのは言うまでもない。

先生がバンクーバーで言った“ I'm proud of you.” という言葉からも分かるように、私もこの海外研修が終わった時にひしひしと感じたのが「ゼミ全体としての成長」であった。そこで、この海外研修で私達を成長させた要素と日本に帰ってきてからの課題について以下に述べようと思う。

私達を成長させてくれた3つの要素を上げると、第一に「海外という知らない土地」、第二に「実践的英語の使用」、第三に「仲間たちの成長」となる。

第一の項目である「海外という知らない土地」について。ここでの成長は、「調査力・実行力」である。全く知らない土地で行動するためにはそれなりの調査が必要になる。事前にガイドブックで軽く下調べをしていた人もいただろうが、やはり現地に行ってみると意外に街が狭かったり、バス停の場所がわからなかったり、とにかく現地に行かなければ分からない細かな情報が沢山あったと思う。

ユニバーシティ・ディストリクトでの最終日の話なのだが、せっかくシアトルに来たのだからボーイング社の見学に行きたいと友達が言い出したので、私も調査に協力した。まずは現地に置いてあるバスや地図の資料でボーイング社へのアクセスについて調べたのだが、具体的なものが出てこなかった。私はインターネットの英語のサイトであらゆる方法について調べ、やっとのことで行き方を見つけ出してあとは現地に行くのみだった。翌朝、他の友人がフロントに聞きに行くと、ボーイングの従業員がストライキを起しているという情報があったらしく、フロントの人がボーイング社に電話をしてくれた。案の定ストライキのため見学はあえなく断念するはめになったのだった。

フロントの人に「行ってからではなくてよかったね！」と言われたのだったが、時間の有効性を考えると本当にそうだったと思う。結局、私たちはボーイング社に行くことはできなかったけれど、あの下調べの時間は無駄ではなかったよねと友達と笑って話していた。

常に先生は「〇〇時に□□集合ね～」と言って私達をほったらかしにし、周りは訳のわからない標識だらけだ。行きたい場所に行くにはアクセスについて調べなければならない。もう最初は慣れるのに大変だった。しかし旅の最後のほうでは、ガイドマップで調べたり積極的に現地の人に話しかけたりして、自ら進んで自分たちの目的に沿って調べ、実行していくということが当たり前になっていた。調査から実行、最終日になるともう何も苦ではなくなっていた。

第二の項目である「実践的英語の使用」について。これで身に着いたものは、「積極性とコミュニケーション能力」だと考える。海外を訪れるということで、外せないのはやはり外国語。外国人とコミュニケーションをとるというのがなかなか少ないという人の方が多かったと思うし、自分の英語が外国で通じるのか不安を抱えていた人もいたはずだ。上から見ているというわけではないのだが、英語はそこそこできるかなという私からみても、はっきり言って英語で話すのが得意ではない人の方がゼミのメンバーの中に多いと思っていた。それは私がみんなに対して、ほとんどの人が英語を苦手としているというか、英語でコミュニケーションをとるのが下手くそというイメージがあったからだ。

以前レスブリッジ大学の学生がゼミの授業に来た際の、英語のディスカッションや食事会の時のことを考えると、相手の言っていることは分かるんだけどすぐに言葉が出てこないとか理由をつけて、英語でのコミュニケーション能力の不十分さに理由をつける様な、そしてシャイという典型的日本人の性質をもった様な人たちが多かった、はずだった。

実際に海外で過ごしていると、日本では街中で赤の他人に話しかけることなんてほとんど無いはずなのに、海外に行くとそれがすんなりできてしまう。私が実際にこの海外研修で見たのは、みんなが現地

の人達に道を聞いたりフロントでお話したり、公園でなんとなく声をかけてみたりと、とても不思議な光景だった。

だけどそれは、菅原ゼミのメンバーは英語を話すのが好きで、とにかく外国人と英語で話したいという人の集まりだという事実裏打ちされた当たり前の行動だったのである。そもそもゼミの内容である国際経営なんかに興味のある奴等が、高いお金を払って海外研修旅行に参加するような奴等が、海外で黙っているわけがなかったのだった。アメリカ人の陽気な人柄に、自然と聞こえてくる英語に、初めて見る物に、景色に、私達のポテンシャルも最高潮。どっちにしても失敗するなら、やらないよりやってみる方がまし。もしも成功すれば自分は多大な収穫を得ることができるという Let' s challenge! 精神のもとに、とにかく多くの人と英語で会話しようという気持ちが行動に出ているのが明らかだった。

海外にいと日本で英語を話す時に感じる様な「恥ずかしさや恐怖感」は、英語で話す「楽しさと喜び」に変わる。8日間の滞在で私を感じたのは、とにかく、「英語」というツールで私たちは積極的になることができ、外国人と簡単にコミュニケーションが取れるようになるということは間違いないということである。それに気づけただけでも、成長と言える。

第三に「仲間たちの成長」について。簡単に言うと、ゼミのメンバー一人一人の成長がみんなの成長に繋がったということである。そこで生まれたのが「志向と団結力」である。

現地について何日か経った日のこと、「明日から単独行動してみるか」とある人が言い出した。しかもそれに賛同するみんなの姿を見て、私は素直に素晴らしいと感動した。私は春から副ゼミ長としてグループのリーダーになって、彼らに指示を与えるという立場から見ることが多かった。日本にいた時とは違って変わった皆の積極性に驚かされた。そしていつの間にか簡単に現地の人に話かけている彼らがとても素敵に見えた。多分他の人たちも、自分以外のゼミメンバーが旅の中で成長していくのを肌で感じていたはずだ。それぐらい私たちは成長して帰ってきた。各自の成長が刺激となって互いに成長しあうという作用を招いたのだ。

私に限っては、明らかに成長していった彼らに、私も負けてはいられないという志向も新たに生まれた。他の人と成長の幅を比べると、私の成長なんてとても狭いものだとは思いますが、それでも私はこの研修旅行で成長することができたと確信を持って言える。だから私も含めて、菅原ゼミのメンバーはこの海外研修旅行で全体として成長したのだ。ゼミのメンバー、お互いがお互いを高められる存在になった。ひょっとしたら、前前からそういう存在であったことに気付かなかっただけなのかもしれない。全員がそういった素質を元から持っていて、長い時間一緒に過ごすことによって力を引き出すことができた。ゼミ開始当時こんなに素晴らしいことが待っていると誰が思ったであろうか。

これがシアトルとバンクーバーが生み出した、菅原ゼミの団結力。

最後に、シアトルから成田の便でオーバーブッキングによりボランティアを募集していた時のことを書こう。一泊シアトルに残り翌日帰国というものだったのだが、多くの人が残りたいと言い出した。ただ、まだシアトルにいたいというだけの事ではなくて、残ることで勉強になることがあると予想したのだろう。10日前、シアトルに到着したばかりの私たちでは想像もつかないほどの積極性。何か行動を起こせば更に飛躍することができる。何かというものは漠然としたものかもしれないけれど、日本にいたら、そんな気さえ起きなかつたらう。

何事にも挑戦していく機会を与えてくれたのが今回のシアトルとバンクーバーの研修旅行だったが、全てのチャンスを確実にものにするのは私たち自身であり、生かすことができなければ何の成長にも繋がらない。「シアトルとバンクーバーが私たちを成長させてくれた」のではなく、「私達が私達を成長させた場所がたまたまシアトルとバンクーバーだった」だけなのだ。この海外研修旅行が終わりを迎える

頃に、なんでもないことをチャンスにかえようとする彼らの姿勢を見た時、この旅が、ただ楽しかっただけの旅行ではなかったのだと、きちんと学んで帰ってきたと、そして人それぞれが成長して帰ってくることができたのだと、私は自分たちに誇りを持って言うことができる。

ここで課題となるのが、日本に帰ってきてもなおこのモチベーションを維持していくために、私たちは一体どうしたらよいのか、ということである。常に互いに高めあえる、尊敬できる存在として、そのラインに自分を持っていくには、やはり新しいことを始めるべきである。

そこで私が提案したいのが、①外国人を招いた授業でコミュニケーション能力の向上を目指す、②テーマに基づき賛否に分かれてディベート(上達したら英語でも)をして、発言の積極性の向上を目指す、③一つのテーマに基づき、個別に英語でプレゼンテーションを行い能力の向上を目指す、の三項目である。これ等を授業の一環として取り入れることにより、個人が個人で得ることのできる限界以上の能力習得が可能と考えられる。

勿論これを実行するには、前提として個人の努力が必要不可欠になる。努力というと人それぞれに必要な努力があると思うのだが、私に関して言えば、どれも手を抜かずに行うことがモチベーションを維持または向上させるのに有効だろう。

私の考えは、ゼミ全体として今後も成長してゆきたいというものである。そのためにも、これからも海外研修で高めたモチベーションを保つことが大切なのだ。

「アメリカの人々・文化に触れて感じたこと」

2年 K I

はじめに今回の海外研修旅行を企画していただいた、菅原先生・トラベルファイブの方・そして旅費を負担してくれた両親にお礼を申し上げます。ありがとうございました。

1. アメリカの地で・・・

さて、私がアメリカの地に降りて疑問を持ったのは、日本車が驚くほど数多く走っていたことである。トヨタ・日産・ホンダ・三菱・スバルとほとんどの日本車メーカーを見ることができた。アメリカの自動車市場は2007年4月24日にトヨタ自動車は2007年第1四半期の世界販売台数が234万8000台となったことを発表した。ライバル社である米ゼネラル・モーターズ (General Motors, GM) も、同時期の販売台数合計が過去最高の226万台を記録したが、これをトヨタ自動車が抑えて販売台数世界1位となった。だが、それは去年のことであり、なぜこんなに日本車をシアトルで見ることができたのか。(図1: アメリカにおける日本車を参照)

2. アメリカ車と日本車の違い

日本車の「品質」がアメリカ車に比べて良いことである。燃費では、日本車は10あたり16.0 km (図2より)、アメリカ車は10あたり8.84 km (1ガロンあたり20.8マイル) であり、日本車の燃費が良い。それは、徹底した品質管理で組み上げられているおり、1つ1つの品質にバラつきが少なく、ハイブリッド技術の応用することによって燃費向上に努めているからである。この製造により、アメリカ車に比べると故障が少ない。アメリカでは故障してハイウェイの路肩で止まっていたら、強盗に襲われる危険が非常に大きく、命に関する問題と言う。日本車はほとんど故障しないので、ボンネットも開けた事がないと言うユーザーが多いそうだ。

最近のガソリンの高値も、燃費の良い日本車に消費者を向かわせている。日本と違い、走る距離が極

端に長いアメリカでは、燃費の良さは圧倒的な優位性がある。アメリカの社用車は、1年で10万kmも走ることが多く、「品質」が重要であり「品質」が問われる市場だといえる。ゆえに20万km走っても全く問題ないトヨタ社のような日本車がいいのだろう。タクシー会社が今まで、フォードの大型セダンであったものを、トヨタのハイブリッド車、プリウスや、レクサスに代えると、燃費が2倍から3倍になり、年間120万円の節約になったそうだ。トヨタ車はほとんど故障しないので、ボンネットも開けた事がないと言うユーザーが多いそうだ。さらに、原油高騰によって、経済的に優しい低燃費車を選ぶ傾向にあり、代表格である日本車が選ばれているのである。

この結果、需要が伸び、そして「品質」が良いので中古車になっても価格があまり下がらない、しかしアメリカ車は値下がり幅が大きい。そのため、消費者は買う時は若干高くても、将来の売却を考えて、日本車とりわけトヨタ・ホンダを選択する人が多いと仮説することができるだろう。

3、その他研修旅行を経て

私がアメリカで学んだことは、アメリカで生活している3人の日本人からの話を聞いたことである。北岡さんの話では国際経営の話だった。大学の講義では、マーケティングでの市場選択の仕方をSTWP理論（どこで誰がどうやって市場を選択して売り込む理論）で展開していたが、その前に「文化」つまり地理・人・宗教・食物などを事前に理解しなければならないことを教えていただいた。例えば、日本酒をバングラデシュで売る。だが、バングラデシュはイスラム教であるため禁酒の国である。当然日本酒は売れない。つまり、STWPの理論では国際経営を行う企業にとっては限界があることがいえる。

そして、地理を見ることでその国の経済・政治がわかるという。例えば、シアトルはアジアに近い地理にあり、その結果日本・中国などのアジアに貿易をはじめとして30%程度経済依存している。また、カスケード山脈（図3を参照）を中心として東西を分けてみると、西部はポートランドをはじめ製造業や港の町が多くその結果人口が多い。東部は農業と酪農の町が多くその結果人口が少ない。西部は緑化整備や温暖化問題に積極的な町や人間が多いため、環境活動に積極的な民主党を支持する人間が多い。一方東部は農業や酪農の観点から污水处理などの環境活動に消極的でありその結果共和党を支持している。私は今まで地理は現在置を特定するために用いたりしていたが、このように地理の観点から政治・経済へと結びつくのに驚いた。旅行の準備するときに加えて位置を覚えるだけでなく、このような連鎖関係を考えたりともっと有効的な活動したいと思った。

山口さんの話は双日の企業説明とアメリカで働いている日本人の話だった。日本のワークスタイルは『島』という自分の仕事場と他人仕事場を隣や向かい合わせにして島のような一つの仕事場を形成しており、残業や接待と会社基盤で会社基盤の生活である。一方アメリカのワークスタイルは個々で個室を与えられ、自分のライフスタイルにあわせて出勤できる。もちろん残業や接待はあまりなく退社時間になると帰宅し、コミュニティや家族のために時間を費やす。さすが自由の国らしいワークスタイルである。

私はアメリカのワークスタイルが日本のよりいいと思う。日本はセクシャル・ハラスメントやパワー・ハラスメントそして過労死と数々の労働問題がある。アメリカのワークスタイルのように自分の仕事場を個室にすることによってプライバシーの保護が可能となり他人から干渉は減少し、残業が少ないため、身体の負担減少及び家族という時間に趣味の時間が増えるのでストレス解消にもつながるためである。だが、アメリカは実力がものをいうほどであり、明日自分の居場所がなくなることもある。自由できる反面、実力を重視するのでリスクを伴うが、社員の一人ずつ切磋琢磨しあい、その結果企業の業績が良くなり、好景気の起爆剤になるから私はアメリカのワークスタイルが日本よりもいいと思っている。

最後、駒田さんの話は駒田さん自身が幼少からアメリカに渡って、最近日本に帰国する話であり、アメリカと日本の違いを学べた。駒田さんがアメリカの小学校に入学したときに、駒田さんは英語を話せなかった。しかし担任の先生をはじめとしてクラスメートが駒田さんに英語を教えたところに私はアメリカ人の優しさを感じた。

私は海外研修旅行1日目でホテルからセーフコ・フィールドに向かう途中で友人達と迷った。見慣れぬ土地で地図を見てもなかなかバス停の位置がわからず、その姿を見たのか、何人ものアメリカ人が話しかけてくれた。日本では同じ言語を話せるからか私たちから話しかけないと教えてくれない、ましてや聞いても『知らない』の一言で終わらせる人すらいる。アメリカ人は映画のように明るく優しい人種であることを感じた。

日本とアメリカの教育制度は異なり、日本は入学するまでが大変であり卒業するのは容易である。しかしアメリカは入学するのは容易であり卒業するのは大変であるという。日本とアメリカはワークスタイルや教育制度など逆の考え方が多いのかもしれない。集団での能率のよさ、個人より集団を重んじることを主とする日本と個人を重んじるアメリカとは根本的に異なるだろう。

私個人としては2度目の海外旅行であったが、自分から英語を使う機会がほぼなかった。つまり聞かれたら話すが、自分からは話せなかったのである。以前私は修学旅行でシンガポールなど東南アジアを行った。学校で企画され、自分の英語が伝わらなくても再度通訳してもらえる環境であった。今回はそんなあまい環境ではなく、友達と一緒に行動しても少人数でほぼ1日中自由行動という実力が試される環境のため『自分の英語が伝わらなければ怖い』というような意識がずっと自分を縛っていた。コミュニケーション中心の英語(総合実践英語とCS-B)を大学で学んできたのにいざというときに使えない自分の技量にショックを受けた。また海外旅行に行くときには払拭できるようにより多く勉強していきたいと思う。

4、参考資料

図1：アメリカにおける日本車



図2：日本車のガソリン乗用車の平均燃費

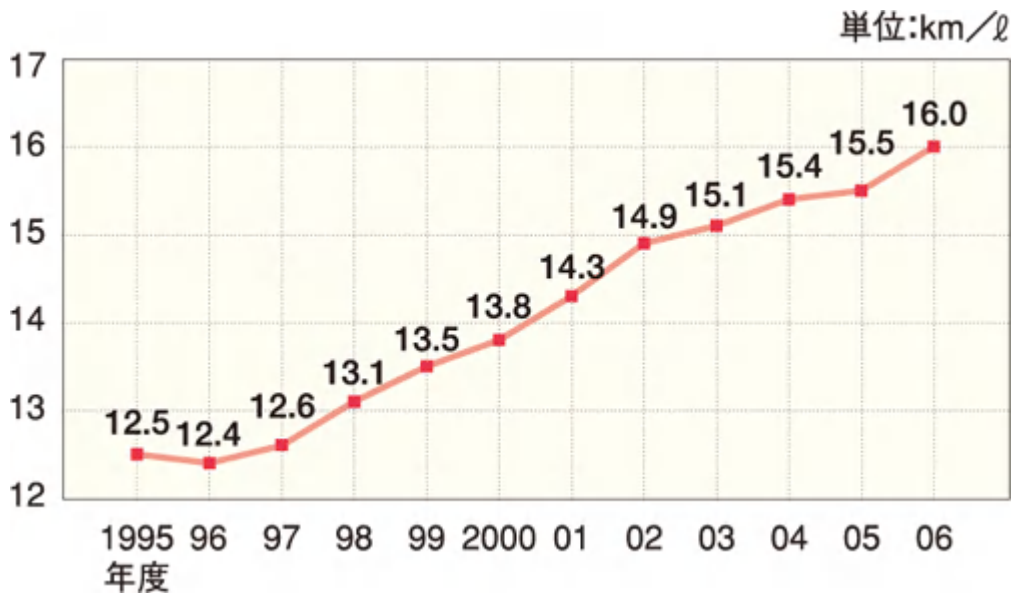
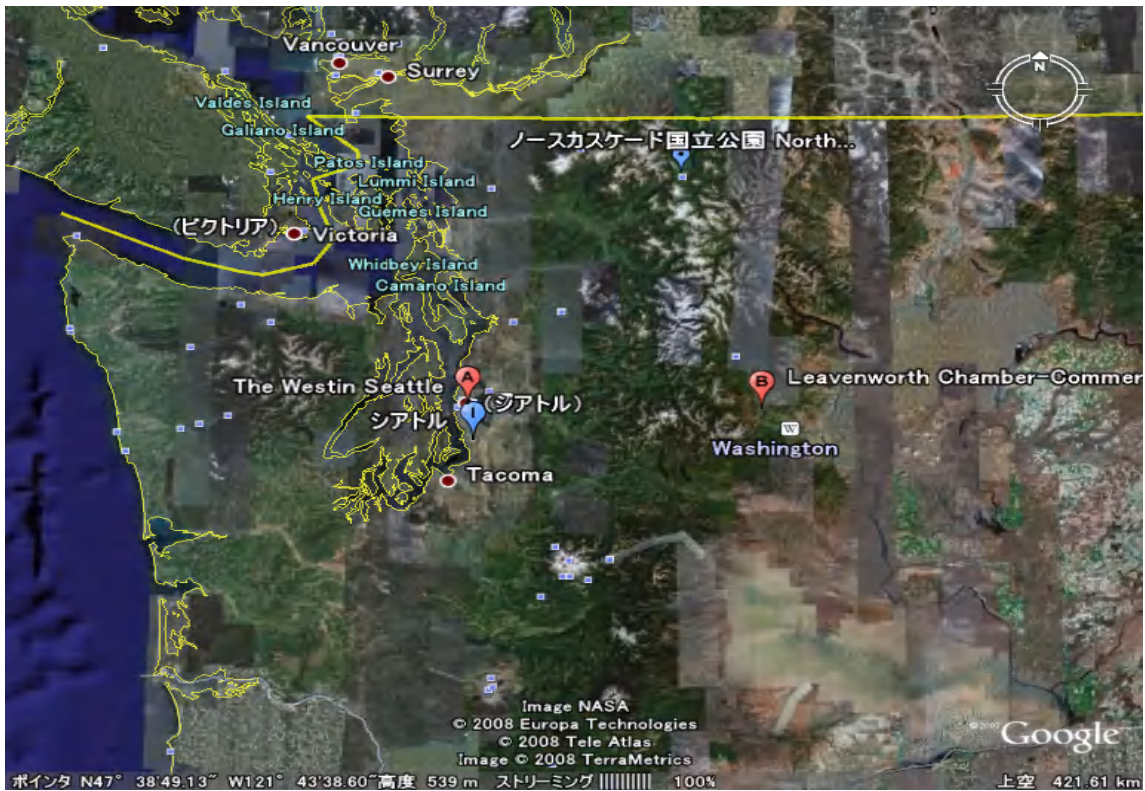


図 3 :



5、参考文献

社団法人 日本自動車工業会 <http://www.jama.or.jp/index.html>

中央日報 <http://japanese.joins.com/>

Life in USA http://www005.upp.so-net.ne.jp/wakanay/usa/usa_index.html